

コロナによって教会が問われていることは何か

項目

- 1 スペイン風邪に教会はどう対応したか
- 2 3・11 東日本大震災に教会はどう対応したか
- 3 コロナは信仰の問題になりうるのか  
「コロナは信仰の問題ではなく、科学の問題である」？
- 4 聖書から何を聞き取るのか
- 5 コロナの中で教会が語るべきメッセージは何か  
沈黙する教会  
見張りの預言者としてのつとめ

- 1 スペイン風邪に教会はどう対応したか

「スペイン風邪と日本の教会」

新教コイノニア 36 「100年前のパンデミック」 戒能信生（日本基督教団牧師）

100年前のスペイン風邪（インフルエンザ）によるパンデミックと、今回の COVID19 のパンデミックには、多くの共通する点があります。私たちが 100 年前の歴史から学ぶことは何でしょうか。簡潔に私自身が考えさせられていることを記します。

それは第一に、忘れないことです。100 年前の出来事、教会関係だけでもあれほどの死者が出て、深刻な影響があったにも関わらず、日本の教会はその経験から、学ぶことをしませんでした。そして、忘れてしまったのです。それは教会の課題ではなく、信仰的・神学的問いかけとは受け止められなかったのです。それが第一の課題です。

第二は、現在、世界で起こっている出来事、各地で今も続く戦争、繰り返される自然災害、そして疫病（感染症）について、私たちがキリスト者としての関心を持ち続けることです。それは、明らかに私たちの信仰への問いかけを含んでいるのです。特に、地球の生態学的な危機に対する問題意識を持つことです。この間立て続けに起こっている新型感染症のほとんどは、限度を超えて人類が自然を破壊して来たことと無関係ではありません。「解放の神学者」レオナルド・ボフが、すでに次のような厳しい指摘をしています。「生態系への破壊、環境破壊の脅威こそ、私たちの時代の最も宗教的で霊的な問題ではないか。基本的な問題は、もはや特定の宗教的伝統の未来の問題ではない。どれほど多くの宗教が、自らのメンバーの拡大に固執していることか。どれほど多くの諸宗教が、未だに生命そのものの複合的なサバイバルに専念するのではなく、自分自身の組織的生き残りに専念しているこ

とだろうか。」

さらに考えさせられた第三のことは、この 1918～1920 年のスペイン風邪大流行のわずか 3 年後、1923 年に関東大震災が起こり、さらにその 8 年後、1931 年に満州事変が始まっている事実です。それは内村鑑三が再臨運動の中で繰り返し語ったことでした。内村の預言者的リアリティーは今なお失われていないのです。確かに歴史はそのままでは繰り返さないでしょう。しかしこれらの出来事は、教会の外で起こっている他人事ではありません。それは私たちの教会の課題であり、私たちのキリスト者の信仰的・神学的課題であると言わなければならないのではないのでしょうか。

## 2 3・11 東日本大震災に教会はどう対応したか

「中世の秋」を生きた教会の希望 片山寛 「中世キリスト教の七つの時」新教出版社

今日の日本も、自然災害と原発事故という、大きな試練の中にありますが、私たちがもしこの試練から学んで、よく考えて適切な社会変革を成し遂げたならば、たとえば、原発を必要としないような、エネルギー消費を抑えた低エネルギー社会を作り上げるならば、あるいは南海トラフの巨大地震に備えるような街づくりに成功するならば、私たちの文明はなおも何百年も存続するかも知れません。しかしただ漫然と、まだまだこれでやれると考えて将来への備えを怠るならば、やがては日本のみならず地球の人類文明全体の滅亡ということになるかも知れません。その可能性は否定できないように思うのです。

「自然災害とキリスト教」というテーマのもとで、黒死病をキリスト教会がどう受けとめたかを取り上げるのは、ごく自然な成り行きだと言えます。なぜなら黒死病は、キリスト教社会が過去に経験した、おそらく最大の自然災害であり、最大の試練であったことは、多くの学者の一致した見解であるからです。

「隣人同士がお互いを避けるだけではなかった。この疫病は、男女を問わず、人々の心に大きな恐怖を植え付けたので、兄が弟を、叔父が甥を、妹が兄を、さらには妻が夫を捨てることもざらだった。だが、もっとも忌まわしく、ほとんど信じ難いのは、父母が実の子に対して、まるで赤の他人であるかのように、看病や世話を放棄したことだ。」(ペトラルカ)

要するに、ヨーロッパの人々は、ペストの恐怖を忘れようにも忘れられなかったのです。たとい日頃は忘れていても、いつまたあの恐ろしい災害が起こって、親が子を捨て、子が親を捨てることになるのではないか。ユダヤ人のような罪のない人々を虐殺してしまうことになるのではないか。その恐怖は長く、残ったのです。もしかすると、今でも残ってい

るかも知れません。ちょうど現代の私たちが、あの東日本大震災と福島第一原発の悪夢を抱えて生きているようにです。

それでは、中世のキリスト教会は、ペストをどのように受け止めたのでしょうか。ペストから何を学んで、それを何か有効な社会改革に結びつけたのでしょうか。その結論は、「彼らは何もできなかった」ということであります。実際に何もできなかった。当時の一般の人々と同じです。客観的に見れば教会はただ狼狽して、慌てていただけだったと言えます。

当時の教会は、ペストに対して有効な対策を取ることができませんでした。ペストの原因すらわからなかったのです。この病気はヨーロッパのすべての町々を襲い、荒れ狂い、人々の苦しみと嘆きと、大きな死体の山を残して、何ヶ月か後に、やはり原因を説明できないままに去って行きました。それは、台風がやってきて、やがて去っていくようなものであり、まさに巨大な自然災害であったのです。

彼らには、黒死病に対して有効な対策を取れなかったことについて、責任はないとしても、それでは、この自然災害から何を学んだのでしょうか。私は二つのことを述べて、締めくくりにしたいと思います。

- (1) 記憶し続けるということ 彼らはこの病気を理解できなかったけれども、それを記憶し続けました。それは恐怖に満ちた記憶であり、明瞭な記憶でなくて、むしろトラウマのようなものだったのですが、とにかくそれを忘れなかったのです。

私たちもまた、今、大きな自然災害と原発事故の悪夢の後にいます。それを過ぎ去った悪夢として忘れない、片付けたいとか投げ捨てる人は、電力関係をはじめ多くいるのです。しかし、忘れないということこそ、私たちが歴史的試練を通じて学び、必要な社会改革をしてゆくための出発点であります。

「過去を心に刻み付けることのできない者は、それをもう一度経験することになる」  
(ジョージ・サンタヤーナ)

- (2) 試みに遭わせないでください ペストによる三分の一の死亡率は、一つの社会が災害を受けて、そこからもう一度立ち上がってゆくことのできた、限界の数字ではなにか、人類の歴史の中にはもっと過酷な状況があつて、あまりにも被害が酷すぎて、もはや立ち上がれずに滅亡してしまった民族、巨大な文明がありました。ですから、私たちにできることは、昔も今も変わりなく「主の祈り」の「我らを試みに遭わせないでください」と祈ることだと私は思うのです。自分の力を過信しないで、様々に努力をしつつも、神に救いを求めること、それが今日の状況における私たちの希望の根拠だと思うのです。

### 3 コロナは信仰の問題になりうるのか

コロナは信仰の問題ではなく、科学の問題である？

なぜ、教会はパンデミックを自分の課題として受け止めることができなかったのか、今なお、パンデミックは信仰的・神学的問題ではないと、どうして考えるのか。

グスタフ・ウィングレン スウェーデンのルター派神学者  
「創造と福音」 1979

デンマークの神学者 オール・イェンセン著「幻想と限定の間の神学」を紹介する。  
ヨーロッパの啓蒙期以降の神学は、カントの影響を受けて、神と自然を切り離し、創造の信仰を失った。神学は使徒信条の第一項を欠き、第二項、第三項のみの神学、信仰となっている。

「幻想の神学」とはカント以前の神学である。カント以前、物理学者、化学者、植物学者、歴史学者はすべて神について語った。例えば、天地創造は歴史的出来事だった。カントは神を理論的学問の領域から追放した。神について語ることは、道徳と実践の領域に限定されるようになった。それが「限定の神学」である。

結果として、我々を取り囲む自然から神について語るものが切り離されるようになった。19世紀の考え方、科学は我々の周りの自然に関わり、そこに神についての語りを持ち込むことは考えられないというのは、自明のこととして受け止められている。そして、神学者は倫理的、宗教的問題にのみ関わるとされてきた。神学者は、人間のみに関わるから、動物、植物、樹木、風、空気、日光は神学者の取り上げる問題領域の外にあることになる。しかし、今日の生態学的危機は19世紀以来の考え方に誤りがあることに気づかせてくれた。カント以降の科学は価値観からの中立を謳いつつ、実際は自然環境の飽くなき利用と収奪と結びついてきた。

他方、神学者は聖書が神と自然の関係を語っているにも関わらず、「限定的神学」の枠にとどまって、科学が自然を収奪することを許してきた責任がある。

聖書が、自然を人間に支配される対象と見ているというのは、誤りであって、聖書は自然を、神のものとして畏敬の念をもって接すべき対象であり、そこで神が人間と出会い、直接的にそこで働かれる場としてみている。

現代の神学者は「幻想の神学」を避けねばならないが、「限定の神学」に陥ってもならない。

#### 4 聖書から何を聞き取るのか

「地球環境に対する人間の責任と行動」谷村禎一

一 [2022 春 北海道中会 ヤスクニ・社会問題委員会ニュース]

核兵器を使用するという脅しを独裁者が実際に語り、原発が戦争で攻撃されることに世界の人々が震撼する日々を私たちが過ごすとは思っていませんでした。福島原発の炉心溶融事故から11年となりますが廃炉の見通しは全くたっていない、放射能に汚染された処理水がたまる一方です。原発は核のゴミ（使用済み核燃料）を排出します。核ゴミの放射能が減衰するには何万年も要するので地中深く埋めるといいます。私たちは数万年後の人類にそのような負債を残して良いのでしょうか。原発の稼働が続くとその負債が増えてゆきます。ドイツは福島の事故を警告と捉えて、原発に拠らないエネルギー利用へと舵を取りました。しかし、最近になってフランスのように原発は地球の温暖化を防ぐために必要だという主張が出てきましたが、近視眼的な考えだと思います。日本の原発が核兵器を開発できるようにするためであることは、「原子力基本法」に2012年に追加された条文「我が国の安全保障に資することを目的」からも明らかです。原発と核兵器の問題は繋がっているのです。核兵器は使用してはいけない兵器であることを国々が知りながら、それを保有することが戦争の抑止力になるという論理は破綻しています。暴発的に核戦争が起これば人が住めない場所ができ、人類は滅亡するかもしれません。地球はだれのものでしょうか？地球の長い歴史の中でホモサピエンスが住み始めたのはごく最近のことです。地球の歴史を1年とすると、人類の2千年の歴史は12月31日の23時59分台の数秒にすぎないのです。

地球における人間の責任について聖書は何を語っているのでしょうか。またこれまで私たちは何を聴いてきたのでしょうか。人間だけが神から与えられた知恵と力を持ち、「知は力なり」（フランシス・ベーコン）と、自然を支配した結果、環境の破壊と様々な汚染を引き起こしたのではないのでしょうか。教会の講壇から語られる説教は人間の救いにだけ集中してきたのではないのでしょうか。人間の罪とは何か。それは人間の心の中のことだけでしょうか。人間の行動によって、自然が痛めつけられてきたのは、人間の罪ではないのでしょうか。

私たちは命を食べることによって生きています。動物も植物も同じように生命です。私たちは豚や牛や鶏たちがどのような気持ちで生きているかに思いを馳せたことがあるでしょうか。彼らにはそのような心があるのかと問う方がおられるかもしれませんが、小さなハエにも脳があり、彼らも痛みを感じており、彼らなりに考えていることがわかってきました。地球は人間の利己的な利益のためあるのではなく、すべての生命と共に生きる場所です。核廃棄場の問題を考えるにあたって、私たちはこれまでの人間中心的な信仰のあり方すべてを省みる必要があるではないでしょうか。

使徒信条で「天地の造り主、全能の父である神を信じます」と私たちは唱えます。神が創造された天と地とは、聖書の中の宗教的な世界ではありません。現実私たちが生きている宇宙とこの地球のことではないのでしょうか。確かに聖書の時代の人々が考えていた天と、天文学の科学的知識を知っている現代の私たちが考える宇宙は同じではありません。ダビデは詩編の8編で次のように謳います。「あなたの天を、あなたの指の業を、わたしは

仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの。そのあなたが御心に留めてくださるとは、人間は何ものなのでしょう。」この思いは、現代人もかわらないと思います。

創世記のノアの方舟の箇所を読み直してみると、人間は自然の管理者であって執事の働きをするようにと神と契約を交わしたことがわかります。にもかかわらず、その働きを怠ってきたのです。この地球上で人間が勝手に振舞ってよいという誤った人間中心主義に染まっていたのではないのでしょうか。旧約聖書の時代に人々が自然とその創造者である神を畏怖したように、私たちも自然を見つめたいと願います。地震や火山活動を人類はコントロールできません。今、人類は新型コロナウイルスに苦しんでいます、数多くのウイルスが私たちの周囲の動物とも共存していて、その中には、パンデミックを引き起こすことができるウイルスが多数あります。そのような状況は、パウロが 로마書で記した以下の箇所に呼応しています。

「被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。…つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。」(ローマ8:19-22)

現代科学の知見から被造物を考えると、地球上のウイルス、細菌をも含んだ全ての生き物が含まれます。アッシジの聖フランシスコは、自然との対話を説いた人として知られています。カトリック教会は、9月第一日曜日から、アッシジの聖フランシスコを記念する10月4日までを「被造物の時節」として「被造物を大切にする世界祈願日」行動を2015年から呼びかけています。教皇フランシスコが全世界に送ったメッセージに次のような言葉がありました。

「世界中のキリスト者は、被造物と隣人への愛を通して、創造主である神に栄光を帰すよう招かれている。わたしたちは責任をもって被造物を守ってきたわけではないことが、自覚されなければなりません。今年、教皇は、正教会と英国国教会と合同で、環境保護を訴える「被造物を大切にする世界祈願日」のメッセージを発表しています。このメッセージを聞いて私たちもその祈りと行動に加わることができるのではないのでしょうか。私たちに求められているのは、神が創造された天と地を現実的なことと捉えてこなかったことの悔い改めであり、具体的な行動です。

鍵をかけ家に閉じこもっていた弟子たちにイエスが現れ真ん中に立たれ「シャローム、あなたがたに平和があるように」と言われました。私たちが、礼拝で平和の挨拶を交わすのは、礼拝に出席している方とだけでしょうか。そうではありません。ドイツの神学者のモルトマンは次のように書いています。

「シャロームとは、神が創造した生きるもの全体の、あらゆる諸関係が聖化されることを意味する。神との平和、人間同士の平和、自然との平和である。神のゆえにシャロームを宗教的なもの、個人的なものへと縮小することはできない。」

わたしたちは人間同士、自然との平和があるようにと言う時、それらの隣人と自然に対

する配慮を呼びかけているのではないのでしょうか。それが可能になるのは、平和がイエス・キリストの十字架によって打ち立てられているからです。

「その十字架の血によって平和を打ち立て、地にあるものであれ、天にあるものであれ、万物をただ御子によって、ご自分と和解させられました。」(コロサイ 1:20)。

地球温暖化、プラスチックによる海洋汚染、生物多様性の減少などの生態学的な危機の渦中にある私たちは、今一度、聖書のみ言葉に立ち帰り、人間が神から託されている自然に対する責任を思い起こし、すべての被造物への愛と配慮を持って具体的な行動で証しするように促されています。

(福岡城南教会長老)

報告者は長く九州大学で教鞭をとってこられた「ショウジョウバエ」の研究者。旧ソ連時代のチェルノブイリ原発事故(1986年)以降「チェルノブイリとキリスト者・九州」の活動に加わり原発の問題に警鐘を鳴らしてこられた。西南学院大学神学部大学院で「キリスト教的共生論」の講義を担当していた。現在「東アジア平和センター・福岡」の理事としても活動しておられる。編集子Wの旧知として提言いただいた。

## 5 コロナの中で教会が語るべきメッセージは何か

沈黙する教会

岩波新書「死者と霊性」 末木文美士編より

阪神淡路大震災(1995年)と東日本大震災(2011年)では何が違ったかという点、「宗教」の力だった。阪神淡路大震災の時は、様々な宗教家たちがいろいろ発言したり、宗教団体も言葉を残した。それが東日本大震災の時は、十分にその働きをなすことができなかった。個人として活躍した宗教家はいた。被災地に入って様々な働きをした人はいた。けれども宗教団体としては、大きな問題を残した。言葉を残せなかったことである。そして、今のコロナ禍の中でも、宗教団体からは何も聞こえてこない。なぜこうなってしまったのか、なぜ「宗教」は言葉を失ったのか。これはとても大きな問題であって、宗教は言葉を失ったら、存続できない。

21世紀になって私たちは急激に人間を超えた存在との結びつきを急激に失っていった。一つには「宗教」自身が、宗教と、それと似て非なるものだったオウム真理教を峻別できなかった。オウム以後、宗教は怪しいもの、近寄らない方がよいものという空気があり、宗教団体は、この問題に対峙せずに、沈黙することで是認した。コロナ禍の中で、宗教が言葉を失った。しかし、宗教が言葉を失った事態の中でこそ、逆に宗教の本質が問われ、また見えてくる。

## 見張りの預言者としてのつとめ

今日、私たちがみ言葉によって示されることは、教会がこの世界のために見張りのつとめを果たすこと、目を覚まして世界に迫っている危機、滅亡の危険を見張り、それを察知したら警笛を吹き鳴らすという責任を神から与えられているということである。教会が神から受けているこの務めを果たすことが不要不急なことであると言うのは全くの誤りであり、反対にこれほど緊急性の高いこと、必要なことは世界にとってないと言うべきである。